

昭和二十一年、郷里に引き揚げてから生家の世話になり、長篠村農地委員会の書記に採用されて生活の安定を見付けた。

昭和二十四年には農林省の統計調査事務所に農林事務官に任命をうけ、昭和五十年定年まで勤務できた。

現在は地区育成会の子供たちに、世の中は礼に始まって礼に終わる、と剣道の指導に余生を送っている信念の川口吉夫翁である。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

私の歩み

愛知県 佐々木 大 吾

私は昭和二年、長野県下伊那郡阿南町新野(旧且開村)の農家の五男に生まれました。

昭和十七年、尋常高等小学校の高等科を卒業しました。その折に、担任の先生から、政府の政策の満州開

拓義勇軍について話を聞かされました。それより以前に、満州に移民した人が帰ってきたときにも、広い満州の話を聞いていました。私は、この山村のように狭い所では、分家する余地は無いと考えました。私も満州へ行って開拓農民となり、成功したいと大きな希望を持ち、成功後を夢見ながら、また、開拓義勇軍に入るのも国のためと決意しました。

長野県上下伊那郡で、一個中隊が編制された昭和十七年三月二十五日、満蒙開拓義勇軍、内原訓練所河和田分所四大隊第四一中隊、原中隊の隊員として、入所いたしました(同年、長野県で四個中隊編制)。

分所で二カ月の基礎訓練を受けた後、五月十五日、敦賀より出港しました。満州国北安省嫩江(のんかう)県伊拉哈(いらが)の青年義勇隊、伊拉哈訓練所へ入所したのは、五月二十一日のことです。

それから三カ年の現地訓練が始まりました。農作業軍事訓練でしたが、開拓団へ行ってから、団員でなんでもできるように、各種、特技訓練も受け、入植の準備もいたしました。私は、木工訓練を受けました。

昭和十九年の中ごろ、入植地も東安省密山県楊木崗ようぼくこう村新立屯しんりつとんに、開拓団建設と決まりました。そこが長野県出身三個中隊の、総合開拓団となるのでした。興凱湖こうがいこへ三十二キロ、ソ満国境まで四十キロで、ソ連の山々が見えるところでした。

昭和二十年一月、伐採班が結成され、住宅用材の伐採に山に入りましたが、私もその一員でした。冬期間で予定量の伐採を終わり、現地人を使って運搬を行い、帰団しました。それからは、住宅の建築班に入り、地面が凍る前、九月末を目標に、建築に毎日励んでおりました。

七月十二日、第五次信州総合義勇隊開拓団、結団式が行われ、全員が張り切って作業に励みました。農耕班の植えたトマトが、色づき始め、入植地での初収穫を業しみに、作業の行き帰りに眺めておりましたが、ソ連の参戦により、収穫を目前にしながら、団を引き揚げたのでした。

団を八月九日出発。汽車に乗れるところを目標に、楊木崗へ向かって歩きました。目的地に着いたがもう

汽車はありませんでした。今度は東安へ向かって三日三晩歩き続け、三日目に、糧秣倉庫が焼かれてくすぶっている所へ着き、焼け残りのカンパン、水あめなどを食べ、野宿をしました。翌朝、東安も駄目との情報があり、東安と思われるところが焼けているのか、何か所か煙が見えました。

勃利ぼつりへ向かって歩く。途中の開拓団の家は、皆空き家になっていました。その空き家に一泊、残されていた乳牛のオスを、食料にするつもりで連れて出発しましたが、馬車、牛は人より歩くのが遅く、本隊と馬車部隊は分かれて進むようになりました。小家宿で小銃が暴発し、一人が負傷したので馬車に乗せ出発、勃利訓練所で本隊と合流し、小休止となりました。このとき、佐藤先生が傷薬があるかもしれないと、訓練所内へ探しに行かれたのですが、なかなか帰ってこられないう。そうこうしているところへ、ソ連軍が近くまできたから山へ入れとの連絡があり、数人が佐藤先生を捜しに行ったのですが、会えませんでした。

仕方なく先生を残し、勃利街道を離れ、山の方に入

って行きました。中国人部落があり、少々撃ち合いとなった。彼らの小銃の数は数丁で、我々の方が数は多いのだが、開拓団の婦人、子供たちが合流していたので、犠牲者が出てはと白旗を揚げました。中国人の方も白旗を揚げ、話し合いの結果、小銃を何丁かくれとのこと。付近は一面の湿地帯であったため、結局、銃を渡して部落を通してもらうことになりました。通り抜ける途中、彼らは更に銃をつきつけ、持っている銃全部を出せという。結局取られてしまい、残った銃は、馬車の負傷者の寝ている下に隠していた銃と、部落を通らず、ほかへ回り道した者が持っていただけとなりました。

部落を過ぎ、野原で夜を迎えました。すぐ近くに勃利街道があり、ソ連軍がトラックに乗って通り、マンドリンを手に行っているのが暗闇の中から見えました。ここからは山中の行進となり、馬車は捨てなくてはならず、木を切り担架を作り、負傷者を交代で担ぎ、一日中歩き通しました。このときは団員はいくつかに別れており、小人数になっていました。軍人が数人、

我々と一緒に歩いていましたが、翌朝、軍人が「担架を担いで山を歩いて行くのでは、君たちがまいつてしまう。歩けない人にはかわいそうだが、付き添って歩いてもらった方がよい」と言われました。本人に「担架を担ぐのはエライから。歩けるか?」と話したら、「肩を貸してくれ、歩いてみる」と言うので、一日目は二人ずつで、両側に付き添って歩きました。二日目は、杖を作ってくれと言われ、杖をついた本人に一人付きました。三日目には杖だけで歩けるようになりました。葉はなかったが、化膿もしなかったようです。山を越えて、開拓地に出ました。

そのはずれに一軒、中国人の家があったので、そこで夕食をとりました。そのとき、二人の中国人がどこかへ出かけて行きました。その夜は、開拓団の空き家に泊まり、翌朝、昨夜の中国人の家に朝食を作りに行くくと、突然、先頭の者が足元を撃たれ、あわてて引き返してきたので、全員裏山に逃げ込みました。私のそばにいた杉江君が即死。私は右腕を撃たれ、赤須君、平田恒男君が止血してくれました。小川のある所で

小休止。傷の手当てをしてもらうのに、雑のうから新しい手ぬぐいを取り出したら、小銃弾がポロリと落ちました。見れば三八式の弾でした。手ぬぐいの角から二センチぐらい中ほどに、一つ穴があっただけで、弾は平たくつぶれていました。あわてて逃げ出したとき、雑のうを肩に掛けただけで、バンドで止めてなかったのので、腹の前へ回っていたのです。正しい支度をしていれば、腹を貫通され、私は死ぬところでした。

昨夜残った飯を、私ともう一人が飯盒に詰めてあったので、十五人ぐらいで分けて食べました。稜線に黒服の騎馬隊が、十騎ぐらい見えてきて、我々の方に向かってきたので、山の中に向かって逃げました。先に山上に着いた者が小銃を撃ち始めると、騎馬隊は、方向を変えて引き返して行つたので、我々は一安心しました。

私は二升ぐらいの米を持っていました。皆は逃げるときに、米を捨ててきたのですが、私は腕をつつていたので、捨てることができなかつたのです。その米を、その夜と翌朝との二回に分けて、皆で食べました。こ

れで米との縁が切れました。

それからは畑のじゃが芋、トウモロコシの盗み食いで、吉林へ向かつて山中を歩きました。一日、四十キロぐらいは進んでいたと、思います。湿地などがあると、回り道をしなければならぬので、直線にすると、朝出発した所が見えるほど、わずかしか進めないときもあり、先の人を通つた草を踏みしめた跡を頼りに歩き続けました。このころになると、自分一人生きるのが精いっぱいでした。

途中、開拓団の婦人や子供などと、合流したこともありました。母親の乳が出ないので、死んでいく乳飲子がおおり、山中で軍人などに弔われた者が多いようでした。子供が置き去りにされていて、「一緒に行く」と言うのと、「母さんが、迎えにくる。ここを動くと、母さんが分からなくなるから」と言つてその場を離れずにいる子供もいた。かわいそうな子供に出会い、一緒に三日ぐらい歩き、二道河子^{にどがし}まできたら、中国人部落に日本婦人がいて、中国人が親切にしてくれるから、と誘われ、一緒に連れて歩いていた(迷子で八歳ぐら

い)男の子と二人、部落に残りました。

八月二十三日ごろ、横道河子の手前の山中で軍の人たちと出会い、「この先に国道があり、ソ連軍の見張りがいるから、ここで待て。軍の人たちも食料がないが、馬を連れていく。小銃を使わずに屠殺できれば、君らが欲しいだけ取って、残りをくれればよい。斥候を出して道案内もするから」と、頼まれました。馬の屠殺を我々が引き受け、後ろ足を一本もらいましたが、人数が少ないので、まだ残りがあるうちに、また次の馬を屠殺しました。一週間ぐらいは、馬肉だけの生活でした。

国道突破と決まり、暗くなるのを待って出発、突破しました。二百メートルぐらいいおきに、三角テントを張り、ソ連軍が数人ずついました。その間を通り抜けて山を大分登ったとき、自動小銃の音がしていたが弾は届きませんでした。

道路、山、線路、そして川、また線路と歩き、山を越えて線路に出たときは、もう朝になっていました。駅の方で汽車の音がにぎやかに聞こえ、何時に汽車が

くるのか気がかりで、必死の行軍でした。二本日の線路を越え、山を二十メートルくらい越えたとき、汽車が近づいてきました。十手に身を隠しながらそーっとのぞくと、屋根の上に機銃をすえ、見張りながら通るのが見えました。夕方、トウモロコシ畑のある所に出たので、取りに行ったら、もう堅くなっていたため、やわらかいのを選んで二食分ずつ取り、遠方から見えないような小さな火で煮て食べ、野宿しました。

翌日、白系ロシア人部落で、日本が降伏したことを聞きました。武装解除して捕虜になれば、部落に入れてやる。いやなら、この方向に行けば吉林へ行けるが、山ばかりで寒くもなるから、死ぬだけであると、捕虜をすすめられました。皆で長時間話し合い、野垂れ死にするなら捕虜になり、だまされたらソ連軍にかみついてでも戦おう、ということに決まりました。半信半疑で武装解除して部落へ入れてもらいました。九月三日のことでした。

屯長始め、親切な人ばかりで、屯長の奥さんが、日本語がペラペラで助かりました。良い物はソ連軍に取

られてしまうから、ここで食べ物と交換してやるといわれ、換えてもらい久しぶりの食べ物で楽しみ、室で寝かせてもらいました。

朝食後、屯長の案内で次の部落に行き、ソ連軍に渡され横道河子で一泊し、ソ連軍の引率で牡丹江へ向かって行軍、途中野宿で一泊しましたが、とても寒くて眠れませんでした。

九月六日、牡丹江の收容所に入れられました。団の者は既に到着していて、我々が最後でした。初めて軍医に腕の傷を見てもらい、化膿した部分を削り取ってもらいました。麻酔薬は使わなかったが、痛みもなく一度の治療で治りました。

十月、駅の近くに移され、汽車への食料積み込み使役に使われました。婦人、子供は海林に收容されていきました。牡丹江では暖房なしでは冬は越せないのです、奉天まで南下が許され、婦女子、体の弱い者が先に出発することになりました。原先生は海林に移っていたので、竹内先生の引率で、道中の食料も配給され、十月末に出発しました。

汽車は途中停車時間が長く、予定より日数がかかり、食料も少なくなりハルビンで下車し、東本願寺へ收容される。汽車の出るのを待つて、十日ぐらい経ってから出発しました。途中、人家も見えない野原で汽車が止まり、何かと思つたら婦人がいる車両が中国人に荷物、着物を取られ女性は裸にされていました。仕方なく麻袋にて体をくるみ、駅から收容される学校まで、四列の中央に入れて歩きました。收容所は、大勢の人でスシ詰め状態でした。皆疲れていて、食事の時以外は寝ていました。

牡丹江にいたときには想像もしなかった事態が、我々の身にも迫っていました。窓から校庭を見ると、コモ包み、麻袋に包まれたさまざまな遺体を馬車に山と積み、ロープでしばって校庭を出て行くのが見えました。配給される食料は相変わらず少なく、遺体を運ぶ馬車は日ごとに多くなって、いやな気持ちで奉天に行く日を守っていました。

牡丹江を出発して一カ月、奉天に着いたのは十一月も末になっていました。

我が団は加茂小学校の二階に収容されましたが、既に皆、病人でした。道中の食料不足と、八月の逃避行約一カ月の疲れが出たのか、自分の体を持て余す有様。医師の診断があり、全員、栄養失調といわれ、その中に発疹チフスや結核にかかっている者も多かったようです。しかし医薬品の支給は皆無。健康者といつても栄養失調者には、階段の上り下りはつらく、手すりや壁に手をつけて、送り足でなければできなかった。炊事は校庭で行い、二人で二階まで運ぶのが重労働でした。鍋はなく、空カンでコウリヤン一升ぐらいずつ炊きました。寝具はなく、麻袋が代用で、用以外は皆寝たままでした。竹内先生が、全員の名簿をひとりひとり、聞き取りで作っていました。

私の隣にいた林重夫君が、「今晚はうまいから、もう一杯いいか」というので、コウリヤンのお粥、杯一杯ぐらいだったが、「うまかつたらたくさん飲んで、早く元氣になれ」ともう一杯やると、彼はそれを飲み、眠くなったから、番がきたら起こしてくれと先に眠りました。私も食事がすんで、寝て待っていました。彼

の番になり、名を呼んでも返事がありません。揺り起こしても反応がありません。彼の呼吸は止まっていた。疲れ果て、眠るがごとく静かな最期でした。

このころから、原先生のご家族の病状は悪化してきました。高熱に悩まされている様子です。子供さんが亡くなられ、気を落とされた奥さんも、後を追うように亡くなられました。そのとき先生も話もできない状態となり、竹内先生、島田勉君、西川公一君、代田耕三君、岡村武志君、仲田三郎君、沢崎昭二君たちが、担架で運び入院させたのですが、付添いは許されず、全員で帰るときには、竹内先生も一人では歩けなかったそう、翌日、死亡の連絡あり。遺体は病院で始末するということで、遺髪、遺爪を受け取ってきました。校庭はみるみるうちに、墓地と化してしまいました。また収容所を変えられ、我が団の者は、鉄西兵舎跡と、十間賦の料理屋ふうの建物に移され、一般避難民と一緒にになりました。

最初は畳一畳に三人の割り振り、狭くて不自由でしたが、毎日二人、三人と亡くなり、空間ができてい

きました。ここへ移ったときから埋葬場所を指定されました。長沼公園の南堤防下に大きな穴が掘ってあり、そこへ山と積み重ね、土をかぶせ、また次の穴へと移って行きました。穴はだれが掘ったか知らないが、このころ、校庭などに埋葬されていた遺体を掘り出して移葬していた作業は、日本人避難民が行っていました。十間賦へ移ったとき、我が中隊では、片山君、故原節夫君、松下先生の奥さんたちが行っていました。

少しは体力も回復してきた我が団の者で、歩き回れる人は、中国人の工場などに頼んで、泊まり込みで使ってもらい、食かせぎをしていました。用事のあるときは、私が連絡に行きました。

私は足に傷を持っていたので、使ってもらえず、病人の世話や遺体の運搬の毎日を送っていました。亡くなられた人は、麻袋を頭から一つ、足の方から一つはかせられ、三カ所縄で縛られる。手押しの消防ポンプを乗せる車に積み、私のほかに女の方二人、両側に縄をつけて引いてもらい、三人で行くのです。女の人は交代ですが、私は毎日でした。朝日の出る前に出発し

ても、帰ってくるのは夕方で薄暗くなっていました。

今、思い起こしてみると、発疹チフス、体格の良い人の栄養失調、子供、老人、そのほか病気のあった人の順に、亡くなられたように思われます。十二月、一月、二月が最も多く、亡くなられた原君は、胸の病でしたが、よく頑張られ、亡くなられた中では、最後でした。

原君が亡くなる数日前に、佐藤先生の奥さんが亡くなられましたが、のどを病み、水を飲むことができなくなり、ただ一人苦しんで亡くなられました。

私の看病をした範囲では、皆眠ったままで苦しまずに逝かれました。三月も中旬ごろからは、亡くなられる方もなく、ひたすら帰国を待つて、日々を送っていました。

昭和二十一年五月末、コロ島へ移り乗船を待ち、六月十八日、やっと日本の土を踏むことができました。

帰国後、実家の農作業の手伝いをしながら体力の回復をまち、二年が過ぎました。当時の村長さんが、復員軍人、引揚者、次男、三男の分村計画を立て、国内

各地を捜し回り愛知県に見つけ、愛知県にお願いして入植させていただくようお願いし、第一回六人と決まりました。

昭和二十三年六月、愛知県開拓指導所、開拓基地農場へ入り、六カ月の指導を受け、二十四年一月、現住所へ入植いたしました。

陸軍の演習地で、土地はやせており、小松や十センチぐらいの笹が生えているだけで、雑草類は生えておりませんでした。配分面積は、一町二反でした。実家の援助で住宅を建て、開墾を始めましたが、手作業で能率は上がりませんでした。満州では失敗でしたので、今度は成功するようになりたい、日々開墾に励みました。

小面積ではありますが、さつま芋を植え、秋に収穫してみると、鶏卵大の物しかできておりませんでした。商品にはなりませんでしたが、蒸して食べたらとてもおいしかったです。トラクターや畜力で開墾して蒔き付けをすれば、大きな作物が収穫できた満州を思い出すのでした。

私は生活できる収入があるようになってから、結婚する積もりでおりましたが、父や兄に、二人で能率を上げなければと勧められて、二十四年十二月、結婚しました。

化学肥料が無いので自分で肥料を作るよう、実家より仔豚二頭を援助してもらい、豚を飼育し、糞と刈り取った笹を混ぜて堆肥を作り、肥料として作物を作りました。一作目よりは良かった商品になるのは、わずかでした。

豚の飼育を多くすればよいのですが、資金が無く、できませんでした。国の開拓資金で、役牛を借りることができましたが、草が生えないので成育が悪く、途中で飼育をやめ、借金が残っただけでした。いつも金が無い、金が無いで出稼ぎをしながらの生活でした。

県の開拓課や農協の世話で、名古屋市の塵埃や日通の馬糞が肥料として入るようになりましたが、開拓者が大勢なので、順番で一回に四トントラック半分、もたえました。

作物も良い物が、できるようになってきました。芋

麦の二作でしたが、畑が良くなり、夏作に西瓜を作り、現金収入を計りました。病害虫が多く、また初めて作ったので、収入はわずかでしたが、この次にはと、希望が持てました。

二十六年七月に長男、二十九年には長女が生まれました。子供が座るようになると、畑の中で一人遊びをさせて、作業をするのでした。

年々、少しずつ収入は多くなってきましたが、借金の返済が始まり、生活は楽にはなりません。少しの資金で鶏のヒナを買って飼育して、現金収入を少しでも多くと思いましたが、梅雨時でしたので、病死で失敗でした。豚を多く飼育しようと思い、六頭の仔豚を買って飼育をして売ったのですが、安く飼料代が出ませんでしたので、豚の飼育もやめました。

化学肥料も多くなってきましたので、畑作だけにし、芋、麦、西瓜を作って、頑張りました。

開墾は十年かかって終わりました。

笹しか生えていなかったこの土地も、雑草が生えるようになりましたので、草を飼料として現金収入をと

思い、三十四年、開拓資金を借り、最初から搾乳できる乳牛を一頭、飼育を始めました。一頭の乳はわずかではありますが、日々現金が入り、畑作の収入の合間に入るの、生活計画が少しは楽になりました。作業は朝夕、搾乳、昼は畑の作業と重労働でしたので、乳牛だけにするように、生まれた牝仔牛を育成し、六年で五頭搾乳できるようになりました。

畑は全部飼料作物を作り、酪農一本といたしました。計画通りにはいかず、収入もなく、二年間は冬季に出稼ぎをする生活を送りました。年々牛も増えて、生活も安定してきましたので、材木を買い、十六頭飼育できる牛舎を自分一人で建て、酪農を続けました。

昭和四十五年、長男が高校を卒業して、家業を手伝ってくれましたので、また材木を買い、牛十頭分の牛舎と飼料置場、堆肥舎を自分で建て、牛も増え三十頭搾乳できるようになりました。

昭和五十年、長女を嫁がせました。五十四年、資金を借りて住宅の増築。五十五年、長男も結婚し、労力も楽になってきました。

私は昭和五十七年十月、胃ガンになり手術を受け、それからは長男に酪農を譲りました。

平成三年、農業公社牧場設置事業で、牛舎を新築し、現在、成牛九十頭、育成牛五十頭を飼育して、酪農経営を続けております。

終戦後五十年を過ぎ、世の中は変わりました。

私の体も老体と変わりましたが、あの小銃弾の傷痕は変わりません。いつも傷痕を見るたびに、戦争の悲しさを、あの大勢の人が死んでいった当時のことが目に浮かびます。

遺体の運搬をしてきた私。今、犠牲者に、遺族に何と言つてよいか、言葉では表すことができません。今後、戦争のないよう祈り、犠牲者の霊にご冥福をお祈りいたします。

【執筆者の横顔】

佐々木大吾氏は 昭和二年六月に長野県の阿南町の農家に生まれ、八人兄弟の五男である。小学校高等科を卒業した。在学中に広い満州の話聞いては憧れて

いた。いよいよ卒業となって担任の先生から、政府の満州開拓義勇軍の話聞いてからは、狭い日本より広漠満州で思う存分働きたい、またそれが国のためだと決心した。

昭和十七年三月、内原訓練所に入所して二カ月間の基礎訓練をうけた後、五月に敦賀から出港、満州国の北安省嫩江県伊拉哈いらがの青年義勇隊で三カ年の訓練を経た。

十九年に東安省密山県楊木崗村の新立屯に長野県出身で第五次信州総合義勇隊開拓団の結団式が行われ、全員張り切つて作業に励んでいた。

二十年八月九日、ソ連の参戦となった。収穫を目前に、佐々木氏らは断腸の思いで、開拓団は引揚げとなった。

東安へは運行停止で汽車はなく、三日三晩歩き続ける。大人の男子は召集されていない。

老人、婦女子ともども手をつないで野宿、東安の街は黒煙上る危険な状況から勃利に向かつて歩く、山また山へ河川を渡り続ける行動、食糧は無し、栄養失調

になる、母親の乳は止まって幼児は死ぬ。老人、婦人は病気になる、戦列から脱落させてはならんと担架で担がれる病人、担ぐ人も涙である。全く地獄の様相である。

それから吉林へ向かって山の中を歩き、畑の馬鈴薯、トウモロコシを盗み食いしての生きざまである。

ようやく横道河子、牡丹江、奉天に着いたのは十一月の末である。横道河子でも牡丹江でも奉天でも、コモ包み、麻袋に包まれた遺体を馬車に山と積まれて郊外に運ぶのを見て、佐々木氏も自分の身に迫るのを感じながら、奉天での避難民生活を続けた。佐々木氏は、八月末に勃利街道でソ連が近くにきたので、山の中に避難し、満人部落で小銃の引き渡し交渉しているうちに二人の中国人が消えた。その後射撃され、佐々木氏は右腕を撃たれた負傷で生涯の傷痍者となったが、奉天では開拓団の多くの病人に対して看護、看病に東奔西走し、涙を流しての行動した佐々木氏であった。

翌二十一年五月末、コロ島から乗船、六月十八日、日本の土を踏む、感激の極みであった。

帰国後、二十三年、愛知県豊橋市東田町の陸軍演習地で不毛の土地、一町二反を開墾し幾多の困難を克服してきた。

平成三年、成牛九十頭、育成牛五十頭を飼育し、酪農経営を続けている。

顧みるに、「艱難汝を玉にす」の古語を大地に記した佐々木大吾氏である。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

あれから五十年

兵庫県 安部 二郎

私の父は関東都督府と呼ばれた時代に金州の警察に奉職し、昭和八年に関東局通訳生に任官、昭和九年には満州国新京にあった関東局へ転出、そのあと満州国政府国務院弘報処へ転出してゐる。父は終戦後、昭和二十年暮れにソ連官憲によりソ連に連行され、そして